りらいと！～マギアレコード　魔法少女まどか☆マギカ外伝より～

転寝

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

役立たずと言われて家族から見捨てられた少女がみかづき荘に迎え入れられて家族の一員となり、様々な魔法少女と交流しながら人生をやり直していくお話。

不定期に更新していきます。

（投稿停止中のため、未完扱いになっています）

（注意）

・この物語は「マギアレコード　魔法少女まどか☆マギカ外伝」の二次創作です。

・見切り発車のため長続きしない可能性があります。

・本編の時系列に沿わないオリジナル展開がほとんどです。

・作者の他作品とのクロスオーバーがあります。

・1話あたりの字数が少ない為、少々ボリューム不足に感じられるかもしれませんがご了承下さい。

・キャラ崩壊や独自設定などが多分に含まれております。

総じて拙い駄文ではありますが、よろしくお願いします。

目　次

はじまりの…　1
不幸自慢じゃないです　8
万々歳に行こう！　14
神浜市、はじめての戦い　19

はじまりの…

環(たまき)いろはが「それ」を見つけたのは偶然だった。
学校から帰宅する途中、小さな公園の脇を通る。いつもは子供が遊んでいたり、或いは部活をサボったらしき学生が屯していたりするのだが…その日は公園に誰もいなかった。
…否、いなかったというのは間違いか。正確にいえば、ひとりだけ…幼い少女が地面に倒れていた。ピクリとも動かないのを見る辺り、ただ転んで泣いていたという訳では無さそうだ。
びっくりして、いろはは少女の元へと駆け寄った。灰色のセミロングにくせっ毛の前髪。目は力無く閉じられており、何よりその手には—黒く濁った宝石が握られていた。
いろはは咄嗟に制服のポケットを探る。しかしこんな時に限ってグリーフシードを切らしていた。
神浜市内では魔女にならないとはいえ、ドッペルを出すのもよろしくない。間に合うかどうかは分からないが、とりあえず調整屋に連れていく事にした。
少女の躰(からだ)を持ち上げ、背負う。驚く程軽く、花車(きゃしゃ)だった。少女の服装は薄手のワンピースというシンプルなものだったが、そこから露出する腕や脚は明らかに栄養不足と分かるくらい細い。
小さく開かれた唇からは苦しげな吐息が漏れ、躰は熱を持っていた。一刻を争う状況だという事は直ぐに分かったので、いろはは全速力で調整屋—　八雲(やくも)みたまの元へと向かった。

＊

「…これでもう大丈夫よぉ」
調整屋の扉を破壊せんばかりの勢いで入ってきたいろはに驚いたみたまは、いろはの背中でぐったりしている少女を見ると顔色を変え、ストックしてあったグリーフシードを少女のソウルジェムに押し当てた。
穢れが吸い込まれ、少女の顔が穏やかなものへと変わる。それを見たいろはは安心した様に息をつき、みたまにお礼を言った。

「ありがとうございます、みたまさん」
「お易い御用よぉ…それにしても、どうしてこんな酷い事になっていたのかしら？」
　少女は魔女化する一歩手前だった。魔女と戦い、勝利したもののグリーフシードが無くて倒れた…それが一番納得がいく説明だったが、どうも腑に落ちない。
　公園で戦っていたのだとしたら、いろはが魔力反応に気付いてもおかしくなかった。だが魔力反応は一切無く、公園で戦っていたと考えるには不自然だという結論に至った。
「まあ、それは本人が起きたらきいてみればいいわね…それより、ファインプレーだったわよ、いろはちゃん」
　みたまは微笑み、少女の寝顔を見つめる。
「ドッペルで魔女化は回避できるとは言え、リスクはあるから…その前に連れてきて正解だったわ」
「私がグリーフシードを持っていればこんな事にはならなかったんですけど…ストックを切らしちゃってて」
　いろはは申し訳なさそうに言う。グリーフシードは魔法少女の生命線だ。神浜にいるとはいえ、切らすのは良くないな…そう、強く反省した。
　その様子を見たみたまがいろはに微笑みを向け、にこやかに言った。
「…なら、うちのストックを買う？対価はひとつにつき調整屋の周りの使い魔退治一ヶ月分という事になるけれど」
「……もしかしてからかってます？」
「冗談よぉ～。本当に困ったらいつでも相談してね」
　今度の言葉は本気だった様なので、いろはも「ありがとうございます」と頭を下げた。
　と、そこで寝台の方から小さな呻き声が聞こえた。どうやら少女が目を覚ましたらしい。
「目を覚ました？」
　いろはがきくと、少女はまだ焦点の合っていない目のまま頷いた。

「…ここは」
「ここは調整屋だよ」
「調整屋…？」
　そのうちに少女は意識がハッキリしてきたらしく、いろはとみたまの方を向いた。
「…えっと、あなたたちは…」
「私は環いろは。よろしくね」
「調整屋の八雲みたまよぉ」
「いろはさんに、みたまさん…ですか。助けて下さりありがとうございます」
　少女は無表情で起き上がり、頭を下げる。
「ううん、大丈夫…あなたの名前は？」
　いろはがきくと、少女は俯いて、
「…名前は、ありません」
　呟くような言葉に、思わず「え」という声が出る。隣のみたまも驚いた様に少女を見ていた。少女はその反応を気にする事もなく付け加える。
「…正確に言うと、名前はありました。でも、使えなくなったんです」
「使えなくなった…って、どういうこと？」
　みたまがきくが、少女は俯いたまま答えようとしない。答えたくないというよりは、何かを我慢している様にも見えた。
　と、その時誰かのお腹が鳴った。いろはではなかったので咄嗟にみたまを見るが、彼女は首を横に振った。
　少女に視線を移すと、俯いた顔が真っ赤になっていた。
「…もしよければ、ご飯作ってあげようか？」
　自然とその言葉が出た。少女が顔を上げ、いろはを驚いた様に見る。だが直ぐに申し訳なさそうな表情に変わり、首を横に振った。
「…いえ、大丈夫で―」
　言い終わらないうちに再度お腹がなり、少女は「う…」と呻いて沈黙した。
「大丈夫だよ。これから帰って作るところだったし、人数は多い方が

楽しいから」
　いろはが優しく言うと、少女は空腹感に敗北したらしく、「…すみません」と謝った。
「大丈夫だから…あ、みたまさん、私はこれで失礼します」
「またいつでも来てね～」
　みたまのホンワカした声に見送られ、いろはと少女は調整屋を出ていろはの下宿先―みかづき荘へと歩き出した。
　少女はいろはの後ろで、ずっと申し訳なさそうな表情をしていた。
＊
　みかづき荘に帰る途中、少女に断って買い物を済ませてからいろはは帰宅した。
「おかえりなさい、いろはさん…って、その子は？」
　出迎えてくれた二葉（ふたば）さながいろはの後ろにいた少女を見て不思議そうな顔をした。次いで環ういもリビングから出てきて、「お姉ちゃんおかえり！」と笑顔で言ったが、その後に少女を見ると不思議そうな表情へと変わる。
「ただいま。えっと、この子はね…」
　いろはが事情を説明するとふたりは納得したようだった。戸惑った様に突っ立っている少女を見て、ういが柔らかい笑顔と共に自己紹介をする。
「環ういです。えっと、よろしくお願いします！」
「二葉さなです。よろしくね」
　ういに続いてさなも自己紹介をすると、少女は「よ、よろしくお願いします」と頭を下げた。
「すぐにご飯作るから待っていてね」
　そう言って少女をリビングに案内した後、いろはは自室に鞄を置き、夕飯の準備を始めた。
　さなも「私も手伝います…」とひっそりと付き従い、ふたりで手際よく料理を作っていく。
　みかづき荘にはあとふたり、七海（ななみ）やちよと深月（みつき）フェリシアという魔法少女がいるのだが、ふたりともまだ帰宅していないとの事だった。

最も、フェリシアはそろそろお腹を空かせているだろうし、やちよも今頃は大学の講義が終わって帰宅途中だろうというのがさなの考えだった。
　実際、それから暫くしてやちよとフェリシアは帰ってきた。ふたりも少女を見て驚いた様だったが、事情を説明するとすんなり理解して、自己紹介をした。フェリシアは若干警戒していたが。
　そうこうしているうちに夕飯が出来上がった。テーブルに運ばれてきたものを見て、フェリシアが嬉しそうに声を上げる。
「おおっ！ハンバーグだ！」
　今日のメインディッシュはハンバーグだった。誰よりも早くフェリシアが手を洗い、嬉々としてハンバーグを食べ始める。
　いろは達もきちんと手を洗ってから座り、いただきますを言って食べ始めた。
　少女はというと、どうしたらいいのか分からないという様子でぼんやりしている。手は洗った様だが、箸を持つ様子はない。
「食べていいんだよ？」
　いろはが優しく言うと、少女はおずおずと箸を手に取り、それを使ってハンバーグを一口大に切り取って食べた。
　―瞬間、少女は目を見開いた。口の中に拡がる味を確かめる様にゆっくりと咀嚼し…ごくりと飲み込む。
「…お」
「お？」
「おいしい……！」
　少女の目から涙がポロポロと零れる。
　突然の事に全員がびっくりして少女を見た。
「どうしたの!?」
「マズかったのか!?」
「いや、さっきおいしいって言ってたでしょ…」
　やちよが呆れた様にフェリシアを見て、それから「大丈夫？」と少女を落ち着かせる様に言った。
「ち、違うんです…こんなおいしいもの食べたの、初めてで…っ」

少女は泣き笑いの様な表情を浮かべる。
その表情を見て、少女がこれまでどういう環境に居たのか、少しではあるが察してどうしようもない気持ちになる。
その後、少女は一心不乱に食事を始めたので、とても事情をきける状態ではなかった。
ある程度の事情をきき出す事が出来たのは、少女が夕飯を綺麗に完食し、食後のお茶を飲んでいる時だった。
＊
「本当に綺麗に食べたわね…」
米粒ひとつ残っていない茶碗やハンバーグの欠片ひとつも残っていない皿を見て、やちよが感心したように呟く。
「ご、ごめんなさい…がっついてしまって」
少女は恥ずかしそうに頬を赤らめる。だが作ったいろはとさなは嬉しそうだった。
「こんなに綺麗に食べてもらえて嬉しいよ」
「作った甲斐がありました…」
ふたりは手際よく茶をいれ、テーブルに運んだ。ちなみにフェリシアだけはホットミルクである。「茶より牛乳だろ！」というのが彼女の言い分であった。
「…それで、もしよければなんだけど…」
茶をおずおずと飲み、その熱さに飛び上がった少女を落ち着かせてから、やちよは口火を切った。
「きかせてくれないかしら？あなたの事を…」
その質問が来る事は予想していたのだろう。少女は少しだけ躊躇う様子を見せたが、こくりと頷いた。
「…そう、ですね。お話しします」
少女は息をふきかけて茶を冷まし、ひとくち飲んでから話を始めた。
「まず―いろはさんには話したと思うのですが、わたしは本名を使えなくなっているんです。だから、偽名という事にはなってしまいますが…とりあえず仮の名を名乗ろうと思います」

少女は立ち上がり、お辞儀をする。
「わたしは真白奏（ましろかなで）といいます。歳は十四歳ですが学校には行っていません」
「十四歳!?オレより上じゃん！」
フェリシアが驚いた様に言う。少女―真白奏の外見はどう見ても十歳程度にしか見えない。
奏は慣れているのか特にリアクションは返さなかった。
「奏さんね。その…本名を使えないというのはどういう事かしら？」
全員が気になっていたであろう事をやちよがきいた。
奏は一瞬だけ迷う様な表情を見せたが、話す事を決めたらしく「不幸自慢みたいで、あまり気乗りはしないのですが…」と前置きした後―とんでもない事を口にした。
「…わたしは、魔法少女として役立たずの存在と看做（みな）されて、家族の縁を切られたんです」

不幸自慢じゃないです

「縁を…切られた？」

さなが驚いたようにきいた。といってもさなだけではなく、その場にいた全員が同じ疑問を抱いていたのだが。

「どういう事？」

いろはがきくと、奏は感情を押し殺した様な口調で淡々と話し始めた。

＊

わたしの家は、魔法少女の存在を認知している珍しい家系でした。父方の祖母が魔法少女だったらしく、父は幼い頃からその存在が当たり前のものだと思っていたんです。そしてそんな父と結婚した母も、魔法少女の存在を知っていました。

母は魔法少女ではなかったけれど、母の姉―わたしの叔母さんにあたる人が魔法少女だったらしく、母自身にも素質はあったようです。

そんな家庭に産まれたわたしは、魔法少女になる事を当然の様に決定づけられていました。わたしにはもうひとり、双子の兄が居たらしいのですが、魔法少女になれないからという理由で「処分」されたのだと…そうきいていました。

わたしには素質があったので幼い頃からキュゥべえが見えていて、魔法少女になって負うリスクの事も把握していました。ただ、安易に契約してはいけないと言われていたので、キュゥべえと契約する事は無かったのですが。

転機があったのは１０歳の時でした。

父が仕事で取り返しのつかないミスをした為、危うく会社をクビになるところまで追い詰められたのです。

そのミスというのは書類の書き換えミスという単純なものでしたが…それが与える影響はとても大きかった様です。当時はまだ子供だったので、そんな事は分からなかったのですが…。

その時、父はわたしを利用しました。

「書類を書き換える」という願いで、わたしを魔法少女にしようとし

たのです。
まだ子供だったとはいえ、魔法少女がどのくらい辛いものなのかは把握していましたし、何でもひとつ願いを叶えるという権利を奪われてしまうので、わたしは必死に抵抗しようとしました。
だけど父は聞く耳を持たず、「お前を育てたのは俺達だ。なら俺達の為に身を捧げるのが当たり前だろう」と言ってわたしを痛めつけ、無理矢理契約させました。
わたしは望まない願いで魔法少女となり、地獄の様な日々を過ごす事になったのです。
＊
そこまで話すと、奏は一度お茶を飲んだ。
誰も、何も言えなかった。願いを奪われ、望まぬ戦いに身を投じる事になった奏の事を思うと、安易に言葉を掛ける事が出来なかったのだ。
奏はほぅ、と一息つくと、やはり押し殺した様な口調で話を続けた。
＊
魔法少女として戦うのは本当に大変でした。
わたしには才能があまり無かった様で、ひとりで魔女を討伐出来る様になるまでには随分と時間が掛かりました。
わたしが魔女退治に失敗する度に両親は怒り、わたしを罵りました。何でも、両親は魔女に魅入られておかしくなった人を元に戻すのと引き換えに多額のお金を得る…といった事を度々行っていて、わたしの戦績が悪いとそのお金が手元に入らないという事情があった様なのです。
グリーフシードは両親が管理していた為、魔女を倒さないと貰えませんでした。ソウルジェムが穢れ切る所まで追い詰められた事も、度々あります。
そんな感じで多くの敗北と僅かな勝利を繰り返しているうちに、両親はわたしに愛想を尽かして養子をとる事を決めました。
養子となった女の子も魔法少女で、わたしより遥かに才能がある子でした。そして両親はわたしを捨て、その子を新たな「道具」にしま

した。家族の縁を切られたのはその時です。
行く宛てが無かったわたしは「魔女化を防ぐ事の出来る街」という噂があった神浜市に向かいました。
そこで魔女と戦ったものの、力尽きて倒れてしまい…いろはさんに救われたという訳です。
＊
話し終わった奏は少しだけ冷めたお茶を飲んだ。
いろは達はというと、暗い顔になって俯いたり、泣きそうな顔になったり…それぞれが悲痛な表情を浮かべていた。奏は何かのリアクションを求めているのだろうが、どうすればいいのかは分からない。どんな反応を返しても、それは彼女を傷付けるだけの様な…そんな気がした。
「ごめんなさい。こんな話…ききたくなかったですよね」
奏は自嘲する様にそう言って、悲しそうな笑みを浮かべた。
そんな事は無いといろはが声を出そうとした瞬間―不意にさなが立ち上がり、無言で奏を抱きしめた。
「さ、さなさん…!?」
流石の奏も戸惑った様子で上ずった声を上げたが、さなは静かに奏を抱きしめている。
「えっと、さなさん…」
「…辛くて、消えたくて…もしかしたら、死にたかった…そうだよね？」
「……！」
奏が目を見開き、さなを見る。
「奏さんがした事は不幸自慢じゃないです。誰かにきいてほしいという自然な事で…自分を守る為の手段なんです」
「……」
「もう、ひとりで抱え込まなくてもいいんですよ。私が一緒に背負いますから…」
さなは慈愛に満ちた顔をしていた。
それを見て、いろははハッとなる。

さなも、奏と同じなのだ。理不尽に翻弄され、消えたいと願ったのだ。
もしかしたら、さなは奏の中に過去の自分を見ているのかもしれない。だからこそ、誰よりも先に奏を救いたいと思ったのかもしれない。
さなは奏から躰を離し、やちよの方を見ると―深々と頭を下げた。
「大変なお願いという事は分かっています。だけど…私には奏さんを放っておけません」
だから―奏さんを私達の家族にして下さい。
さなはハッキリとした口調で、そう言った。
「二葉さん…」
やちよは驚いたようにさなを見る。そしてそれは奏も同じだった。
「なんで、そこまで…」
不幸自慢はやめろと言われる事を覚悟していた。
なのに、それを受け入れてくれて、なおかつ自分を助けようとしてくれている。
奏には、なぜさながそこまでするのか分からなかった。
「…私も、同じでした。辛くて、消えたくて…もしかすると死にたかったのかもしれません。だからこそ私は、奏さんを放っておく事が出来ないんです」
静かな口調。
だけど、そこには確かな重みがあった。
「やちよさん、いろはさん、フェリシアさん、ういちゃん…お願いします。私も、誰かを助けたいんです」
「…やちよさん、私からもお願いします」
いろはもやちよに頭を下げた。
「厳しい事は分かっています。だけど…このまま見捨てる事なんて出来ません」
フェリシアも、ういも…口には出さなかったが気持ちは同じだった。
そしてそれは、やちよも。

「…頭を上げてちょうだい。全く…私が悪者みたいじゃない」
　やちよは呆れ半分、感心半分といった口調でそう言うと、奏を見た。
「私としても、放ってはおけないわ。いくつか条件は付ける事になってしまうけれど…それでいいなら来なさい」
「…いいんですか？」
　奏は半信半疑といった様子できく。
　やちよが迷いなく頷くと、その顔が必死なものへと変わった。
「わ、わたし…何でもします！出来る事なら何でもしますから、だから…っ」
「大丈夫よ。私達は決して見捨てたりはしないわ」
　やちよは微笑む。それを受けて、フェリシアが思い付いた様に言った。
「ならさ、どっかでバイトすればいいじゃん。オレだって鶴乃（つるの）の所で働いてるし、そうすれば食費とか払えるだろ？」
「だけど、奏ちゃんはまだ１４歳だよ。雇ってくれるところ、あるのかな…」
「あ？んなの万々歳で働きゃいいじゃねぇか」
「うーん…でもこれ以上雇えるのかなぁ」
　いろはの不安そうな言葉に、フェリシアが噛み付くように言う。
「なら、かこに話してみる！アイツん家本屋だから、事情話せば雇ってくれるかもしれねぇじゃん」
「あ、あの…それはわたしがやるので…」
　奏がそう言ったが、フェリシアは「だって神浜に来たばっかりなんだろ？ならオレに任せとけよ！」と威勢よく返した。
「フェリシアさん、かっこいい…！」
「へへん！たまにはいいとこ見せねぇとな！」
　ういの憧れの眼差しを受けて、フェリシアはすっかり上機嫌になっていた。
　さなはそれを見て微笑むと奏の方を向いて、にっこりと笑った。
「今日から、よろしくね」
「…はい！」

そこでいろはが思い付いたように声を上げ、みかづき荘メンバーに言った。
「そうだ、改めて挨拶しないとだね！」
「ええ、歓迎会…には少し遅いし、鶴乃も今日は来ていないけれど…これだけは言っておかないとね」
「歓迎会は鶴乃が来た時だな！」
「え、ええ…？」
奏が戸惑っていると、皆は「せーの…」と声を揃えて、
『みかづき荘へようこそ！』
その声が、あたたかく染み渡っていく。
急展開で、実感が湧かない部分もあるけれど…それでも、わたしはこの人達と家族になったんだと、そう思えた。
「これから、よろしくお願いします！」
奏は少し泣きそうになりながらも、笑顔で頭を下げたのだった。

人生のやり直し。
幸せを掴むための物語が、ここから始まる。

万々歳に行こう！

奏がみかづき荘に迎え入れられてから五日が経過した。
そしてこの五日で、奏を取り巻く環境は大きく変化していた。
みかづき荘に迎え入れられた時、バイトをすると決意したのだが、十四歳の少女を雇ってくれる所はほとんど無い。
動画サイトに動画を投稿して広告料を稼ぐ…という事も考えたのだが、先が長過ぎるし有名になれる保証は無い。
やちよに推薦されてモデル業…という案も出たのだが、これも断念した。モデル業は容姿だけでは無いし奏は可愛らしい顔立ちをしていたので出来なくはないと思われたのだが、そもそも時間が掛かるので現実的では無いという結論に落ち着いた。
後はアンケートモニターなど、家でできる仕事くらいなのだが…これは大したお金にならない。どうしようか迷っていた所、意外な所から救いの手が伸びてきた。
夏目（なつめ）書房の一人娘である夏目かこにフェリシアが奏のバイトを頼み込んでくれたのだ。
そしてかこの手引きによって夏目書房の店主に会い、魔法少女の事を除いたある程度の事情を話した結果、賃金は安いがそれでもいいならという事でバイトを認めてくれる事になった。
とはいえ、年齢的には中学生なのに学校に行っていないというのも問題がある。一応小学校は卒業しており、中学校も少しの間ではあるが通っていたとの事だったので、色々考えた結果、神浜市立大付属学校の中等部に転入する事に決めた。といっても、生活に慣れてからになるのでまだ少し先にはなるのだが…。
そんな訳で周りの援助もあり、奏は少しずつ新しい生活に馴染んでいった。
＊
その日、奏がバイトを終えて帰宅すると、いつものメンバーの他にひとり、見慣れない少女がいた。彼女はリビングに入ってきた奏を見ると目を輝かせてこちらに近付いてきた。

「きみが奏ちゃんかー！」
「は、はい…えっと、あなたは？」
テンションの高い少女に奏は戸惑う。といっても奏は普段からローテンション気味なのだが。
少女は「あ、自己紹介しないとだね」と思い出した様に言ってから、にっこりと笑顔になり、
「わたしは由比鶴乃（ゆいつるの）！最強の魔法少女だよ！」
「さ、最強…？」
「気にすんなよ奏、自称だから！」
「えー!?ひどいよフェリシア～！」
フェリシアの言葉に、少女―由比鶴乃は頬を膨らませた。フェリシアは慣れているのか「でもま、実際強いんだけどな！」と付け加えた。
それで鶴乃はまた笑顔になる。表情がコロコロ変わって中々面白かった。多分、奏には出来ない芸当だろう。
「えっと、わたしは真白奏といいます。よろしくお願いします…」
いつもの様にぺこりと頭を下げると、鶴乃は「うんうん、よろしくね！」と奏の両手を握った。
眩しいくらいの笑顔に奏は戸惑う。みかづき荘メンバーは基本的にみんないい人なのだが、鶴乃はその中に底無しの明るさがある様な…言ってしまえば、太陽の様な人だと思った。
まあ、恥ずかしいから口にはしなかったけれど。

＊

「鶴乃ちゃん、最近来なかったけど忙しかったの？」
場が落ち着いたところで、いろはが鶴乃にきいた。
「うん…団体のお客さんが入ったりしてたし、あと勉強教えたり部活のピンチヒッターに入ってたりしててさ。ようやく落ち着いたんだ」
鶴乃が済まなさそうにそう言うと、やちよが「大変だったのね…」と鶴乃を見て、労る様に言った。
「お疲れ様。辛い様だったらいつでも相談しなさいね」
「えへへ…大丈夫だよやちよ、ありがとう」
鶴乃は嬉しそうに微笑むと、何かを思い付いたように「そういえば

…」と呟いた。
「奏ちゃんの歓迎会ってもうやったの？」
「まだやってません…鶴乃さんが来てからやろうって話していたので」
さなの言葉に、鶴乃は「ふむふむ…」と考え込んでから、
「…ならさ、ウチ来ない？」
「ウチって…万々歳？」
やちよが少し驚いた様に言った。それと同時に頭の片隅ではお財布と相談を始めている。みかづき荘は基本的に節約がモットーなので、即断即決という訳にはいかないのだ。
最も、今回は祝い事なので財布の紐を多少は緩める気でいたのだが。
「奏ちゃんにも万々歳の味を知ってもらいたいからね！」
「最近ラーメン食べてねぇし、それもいいかもな！」
早速、フェリシアが賛同した。
「確かに、今から買い物行ってご馳走つくるとなると時間が掛かりますね」
いろはが時計を見ながら言う。
「わたし、ラーメン食べたい！」
「私もです…」
ういとさなの賛同を受けて、いろはが「どうします？」とやちよを見た。
やちよは暫く考えてから、
「真白さんの歓迎会だし、真白さんの意見をきいて決めましょう」
そう言って奏の方を見た。
「わたしの意見…そもそも、万々歳ってどんな所なんですか？」
「万々歳は参京区にある中華料理屋だよ」
「ひいじいちゃんとじいちゃんが築いた由比家の誇りだよっ！」
「中華飯店…」
というと、ラーメンやチャーハンなどだろうか。食べた事が無いので、前々から興味はあった。

奏はみんなの顔を見渡し、
「皆さんが良ければ…わたしも行ってみたいです」
好奇心を顔に浮かべながら、そう言った。
＊
万々歳は空いていた。
といっても今は夕食には少し早い時間帯であり、客が入り始めるのはもう少し後の事なのだろう。
厨房に居た鶴乃の父親に挨拶した後、各々が好きなメニューを注文する。奏は初めてだったのでシンプルな醤油ラーメンを注文した。
ちなみに、魔法少女では無い者にはさなは見えないので、鶴乃の父は人数とラーメンの数が合わない事に首を傾げていたようだったが、特に詮索はしなかった。万々歳で食事をする時はいつもこんな感じなので慣れているのだろう。
他の所ではどうしているのかきいてみると、やちよが多く食べるという事で誤魔化している様だった。そもそもそんな事をきかれる事は少ないのだが。
そんな会話をしている内にラーメンが運ばれてきた。配膳は鶴乃も手伝っている。
早速、各々がラーメンを食べ始める。万々歳は不味くはないが旨いとも思われないという「五十点」の店なので、みかづき荘メンバーは特に感想を言わずに食べていた。悲しいが、これもいつもの光景である。
ただひとり、奏だけは初めて食べるラーメンに興味津々だった。インスタントラーメンすら食べた事が無かったし、そもそも家族で外食なんてした事が無かったのだから当然といえば当然の反応である。
みかづき荘に来てから、奏の栄養バランスは改善傾向にあった。家族の元にいた時は味の無い硬いパンと水だけという生活だったので、ここに来てからようやく色々な物を美味しく食べる事が出来たといえる。
あっという間に食べ終えた奏は、鶴乃の「何点だった？」という質問に「百点です！」と笑顔で答えた。ちなみに、スープを全部飲もう

としたらやちよに怒られたので渋々と残していたりする。塩分過多になるので仕方がない事なのだが。

久しぶりの満点評価に鶴乃が喜んでいると、フェリシアが

「奏は初めてラーメン食ったんだし百点評価つけるだろ」

というツッコミをしていた。

それで鶴乃は意気消沈したのだが、「それでも嬉しいよ！」と直ぐに笑顔になっていた。

お会計を済ませて万々歳を出た時には夜になっていた。

お腹も満たされ、新しい体験も出来て…今日も幸せな一日だったなぁと思いながら、奏はみんなと帰路についたのだった。

ちなみに、奏がラーメンを初めて食べた事をかこに話した所、目を輝かせたかこにラーメンの食べ歩きに誘われたのだが…それはまた別のお話。

神浜市、はじめての戦い

それはバイトの帰りでの事だった。
奏が通い慣れた道を歩いていると、躰に電流が走る様な奇妙な感覚を覚えた。
それと同時にソウルジェムの指輪が熱くなる。これは—魔力反応だ。
奏はソウルジェムを宝石の形に変え、魔力反応を探る。いつもなら歩き回り、あちらこちらを探さなければ行けないのだが…今回はその心配はなかった。
(…向こうから来てる?)
魔女が此方へと向かってきていた。こんな事は初めてだったので少し驚いたが、どの道倒すつもりではあったのでむしろ有難いといえる。
そうしているうちに、周りの景色が変化した。夕焼けに染まるアスファルトが広大な砂場と散乱する遊具に姿を変えていく。
遊具の影からは複数の団子に足をくっつけた様な使い魔が現れ、奏を無感情に害そうとしてくる。その数は十匹ほどで、いちどに相手にするにはキツい数だった。
だが…やるしかない。
使い魔が攻撃してくる。
自らの躰を飛ばすという奇妙な攻撃を、横にズレる事で回避。
そのまま突撃し、部分的に魔法少女に変身した。具体的には、腕のみを変化させた。
そのまま殴り掛かる。
使い魔は吹っ飛ばされてひっくり返った。
喜ぶ暇もなく、もう一体が背後から襲いかかってくる。
今度は完全に変身し、横に転がる事で回避。
体勢を整えたその手には銃が握られていた。それを無造作に構え、使い魔に発砲。
無数の銃弾が使い魔の躰を貫き、骸に変えた。

すぐさまリロードし、別の使い魔を撃つ。
だが、数が多過ぎる。いくら弾幕を張ったところで、背後は守れない。
「うあっ！」
背後からの攻撃が直撃し、熱い砂の中に倒れ込む。
口に入った砂を吐き出してから起き上がり、近付いてきた使い魔を銃で殴り飛ばす。
今度は左側面から攻撃が飛んでくる。
躰を前に逸らして回避。しかしそれを狙っていたかのように四方八方から攻撃が飛んできた。
「…あ」
避けれない。
次の瞬間、奏は激痛と共に床に倒れ込んだ。
「あ……ぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
口から出るのは呻き声のみ。
激痛で目に涙が滲む。
立てない。それどころか、倒れている事すら苦痛に感じる。
意識を失っていない我が身を呪いたくなった。
（……とりあえず、魔法で治癒力を上げなきゃ…）
やるべき事は分かっている。
だけど、それが出来ない。
ぼやけた視界に、カラフルな使い魔が映り込む。
ああ…殺されるんだな。
何故かすんなりと、その状況を受け入れた。
侮っていた。使い魔にさえ苦戦するなんて…。
確かに、奏は以前いた街でも強い魔法少女ではなかった。むしろ弱い方で、時として使い魔にも苦戦する程だった。
それでも、両親のスパルタともいえる教育を受けて多少はマシになった。その筈だった。
だけど、それは間違っていた。
自分は弱いままなのだ。

実際、神浜の魔女や使い魔は他の街のそれより強い。それは奏も噂できいていたし、覚悟はしていた。
それでも、使い魔にさえ勝てないのではこの街でやっていけない。
なら、ここで死ぬのも仕方がない事じゃないか…。
（…ごめんなさい）
脳裏に浮かぶのは、みかづき荘のみんなの顔。
変われると思ったのに、まさかこんな簡単に終わるなんて思わなかった。
使い魔がトドメを刺そうと近付いてくる。
躰が痛みに耐えられなくなったのだろう。奏は目を閉じて…そのまま意識を失った。
＊
僅かに時間を遡る。
学校からの帰り道、十咎（とがめ）ももこは魔女の反応を感知し、結界を探していた。
なんで疲れている時に限って来るかなぁとぼやく。今日はももこにしては珍しく一人で行動していたし、学校帰りなので疲れてもいる。だがそれを理由に魔女を見逃すなど、ももこには出来なかった。
魔力反応を頼りに動き回り、結界を見つけて中に入る。
砂場の魔女の結界だった。入口付近に使い魔の姿は無いので気にせず進むと、少し行ったところに使い魔が密集しているのを見つけた。
まさか、人が入り込んだのか—自然に駆け出し、武器である大剣を振り回して使い魔を蹴散らした。
使い魔が狙っていたのは花車な少女だった。飾り気のない白いコートと黒いブーツという出で立ちで、首から下げたペンダントには鍵を象った宝石がついていた。
少女の隣には軍用らしき銃が転がっていた。恐らく…というか、確定で魔法少女だ。
少女はぐったりしている。見かけない顔だし、この街に来たばかりなのかもしれない。

魔女を放っておくのは心苦しいが、それよりも人命優先だ。ももこは少女を護るように立ちはだかり、大剣を構える。
使い魔の攻撃が飛んできた。
避けたら少女に当たってしまう。かといって食らってやる事もないと思ったので、大剣でガードした。
少し後ろに下がるが、それだけだ。そもそもこの程度の使い魔なんてももこからしてみれば雑魚に近い。
攻撃を冷静に見極め、防御したり弾いたりしてやり過ごす。といっても防御ばかりしている訳にもいかないので、ももこはある程度の攻撃を凌いだ後で攻撃に転じた。
大剣で次々と使い魔を薙ぎ払っていく。倒す必要はないが、数が少ないに越したことはないので倒すつもりでやっていた。
大剣なので、多少は動きが鈍くなる。その隙を突いてくるヤツもいたが、そんな事は予想済みだった。
蹴りを食らわせ、使い魔を吹き飛ばす。魔力を込めていたので面白い様に吹き飛ばされていった。
倒せば倒すほど使い魔は出てきたが、それでも無限ではない。暫くすると出現する数は減っていき、遂には一匹も出現しなくなった。
ももこにしては珍しくグッドタイミングだった。自分を褒めてもいいくらいかもしれない。
「ふう…」
一息ついてから少女の方を見る。
相変わらず意識を失ったままだ。ソウルジェムの色も濁っているし、調整屋に運んだ方がいいだろうと思った。
少女はももこより小さかったので簡単に背負う事が出来た。恐らくまだ小学生だろう。
かわいそうにと呟いてから、ももこは結界を脱出して調整屋へと向かった。
移動しながら、そういえば…と思い出す。
(この前、いろはちゃんが外から来た子を調整屋に運んだとか言ってたな…)

昼食の時、いろはからきいた話だ。
なんでも、今はみかづき荘に引き取られ、慣れない生活に戸惑いながらも楽しくやっているのだとか。
一度会ってみたいなと思っていた。最近はみかづき荘にも顔を出していないし、調整屋の帰りに寄っていくのもいいかもしれない。
自分が背負っている少女がみかづき荘の新たな新入りだとは全く気付かず、ももこは慣れた様に調整屋への道のりを歩いていったのだった。